愛知北米移民の研究（Ⅲ）

―移民と望郷の念―

筒　井　　正

Ⅰ．はじめに

明治から大正期にかけて、愛知県の尾張西部から多くの若者が出稼ぎを目的として北米に移民していった(注1)。日本人排斥運動が激化し日米関係が悪化する状況下にあっても、渡米熱はさめなかった。

地域の経済発展に大きく貢献した移民は、生活習慣が異なる異国の地で言葉の障壁をものともせず、錦を着て郷里に帰ることを夢見て額に汗して働いた。移民にとって、心の支えになったのは、郷里の肉親からの音信や信仰、そして、移民仲間との交流であった。

本論では、明治末期にアメリカへ移民した山内健之助が郷里の長兄に宛てた手紙をもとに、異文化社会に身を置く移民と郷里の肉親との関わりや、夢と現実との狭間で苦悩するその心の内を探ってみたい(注2)。

Ⅱ．移民と郷里との関わり

1）メキシコ廻りでアメリカへ

山内健之助は、1885年尾張西部の稲沢で農家の三男として生まれた。健之助が生まれ育った明治から大正期にかけては、日本の近代国家建設の途上にあたり、多くの若者が留学生、あるいは出稼ぎ移民として海外に雄飛していった。とりわけ、経済格差の大きなアメリカは主要な移民希望先であった。

日清・日露の両大戦で日本が勝利をおさめると、欧米諸国間に黄禍論がわき起こり、特に、アメリカ西海岸のカリフォルニア州では日本人排斥運動が高揚し、1906年４月に起こったサンフランシスコ大地震は市街地に大惨事をもたらしたの

みならず、排日の嵐を一層激化させ、日本人学童排斥事件を引き起こし、日米関係は悪化の一途をたどった。

しかし、日本国内における渡米熱は冷めることなく、移民希望者は増加の一途をたどった。サンフランシスコ大地震によって港の機能が麻痺すると、移民希望者はワシントン州シアトルやさらにはメキシコを経由してアメリカに入国していった。1901年から1908年にかけて契約移民としてメキシコに渡った者は約8,000人で、このうち愛知県出身者は715余名にのぼっている。メキシコに渡った移民の大半は最終目的地をアメリカとしており、メキシコに着くやいなや移民会社との契約を破棄してアメリカに向かった(注3)。

健之助は、1906年10月25日同郷の者16名で、大陸殖民会社を通じて神戸港より琴平丸に乗船し、「水上警察やら川崎造船の楽隊やら大陸殖民会社の社員やら数十名、船十五艇之見送り有り。煙火を打上げると同時に大日本帝国万歳、大陸殖民会社万歳、琴平丸万歳」(1906, 12, 7付)というような盛大な見送りを受けて、メキシコに向かった。

同年11月30日、メキシコ国マンサニヨー港到着。12月6日より、コリマで労働に従事するが、大陸殖民会社の代理人藤田小五郎と対立し、契約を破棄して津島や佐織出身者9名でアメリカに向かった。1907年2月21日、米墨国境の町エルパソから入国税2ドル(4円)支払ってアメリカに入国。翌22日、コロラド州のラウスに到着した。

健之助はラウスに到着した直後郷里の長兄山内玉三郎に宛てた手紙で、「明日(2月23日)より就働。二、三年の内に本望を遂げ送金する予定。安心してほしい」(1907, 2, 22付)と記しており、渡米の目的は、金を稼いで郷里の実家に送金するところにあった。

健之助の実家は資産家にして名士の家柄でもあった。父山内嘉左衛門はすでに死去し、長兄玉三郎が家督を相続していた。資産家の家に生まれ育った健之助にとって、アメリカへ移民することは、村人から軽蔑の眼で見られているととらえていたようで、4月中旬に長兄に宛てた手紙に「在宅中は遊怠放逸に交わり居りしが、之れは一洗致し只節験を旨として片時も早々錦を着て故郷に帰らん心組みに相成りましたから安心して下さい。日曜夜毎に経読及び英語の稽古を致候共、

暇に碁及び将棋を致し無上の楽しみとし今日を暮らす。吾々も昨今に至り大方借金も払い、今よりは益金と相成る故一日も早く内地へ送金致し村中の汚名を洗い村民を驚かさん心組みであります」（1907.4.19付）と記している。

2）労働の日々

山内健之助はコロラド州ラウスに到着して直ぐに職を得たが、これは日雇い労働であり、しかも英語が解せない不便さを痛感し、3月中旬にデンバーに出て、スクール・ボーイ（白人宅に住み込んで昼間働き、夜間に学校に通って語学などの勉強をする若者）として就労した。スクール・ボーイの給料は1週間に2ドルほどになった。このスクール・ボーイをしながら語学を習得した移民は多くいた。しかし、雇い主との関係がうまくいかず、1ヶ月ほどで辞めて同年4月22日、プエブロ市の鉄工所に職を得て働き始めた。

新しい職場について、郷里に宛てた手紙に「此鉄工所は米国中の一二を争う大鉄工場にて会社の周囲は十二哩計り、労働者は年中平均七千人計りの様子なり…中略…目下日本人の通勤者は五百名以上にて皆睦まじく日本町を開き居り候…中略…一日の賃金は一弗七十仙でまずまずの給与で、私も一番活動致し大金を母国に送り天晴れ愛国の士と唄れん事を勉め居り候」（1907,4,24付）と記している。健之助にとって、大金を手にし郷里に送金することは、資産家に生まれながら、アメリカへ出稼ぎに来たという汚名を晴らすことにつながり、さらには愛国の士と讃えられることになるのであった。

健之助は、この大きな鉄工場で鉄棒にネジを切ったり、できた製品を貨車に積み込む仕事を行った。早朝3時から働きはじめ、途中長い休憩をはさむものの夕方まで働く。1日の労働時間が極めて長く、しかも立ち通しで大変疲れ足は棒のようになると仕事の辛さを長兄に訴えている。しかし、1日の賃金は1ドル70セントと高く、2ヶ月を過ぎると、その労働形態にもようやく慣れてきたとみえ、長兄に宛てて「心面白く又元気好く暮らして居りますからまず安心してください」（1907,6,20付）と記している。

この手紙を出した直後、仕事中に怪我をして20日あまりも欠勤を余儀なくされるという災難に見舞われたが、7月には郷里に宛てて25ドル（日本円で50円）を送

金した。これが健之助の送金の始まりであった。移民して僅か5ヶ月目の事である。健之助にとって、この送金が無事郷里に着くか否か、はなはだ心配であったとみえ、送金通知の手紙には「送金の手始と致し今回銀行為替にて七月二十八日に差し送り置き候間、最寄りの銀行より御受取下され度候。今度は日頃と違う故御入手早々御返事下されたく候。其までは心配致す云々」と記し、受け取り通知の手紙を強く望んでいる。ようやく、念願の郷里への送金が出来たという誇らしい気持ちと、現金が長兄のもとに無事到着するかどうか不安な気持ちとが入りまじっている様子がうかがえる。

7月26日、長兄から届いた手紙によれば、「大工左官などを雇い入れ諸所御普請」と実家の増改築の様子が記され、さらに「内地の親類知己友人等の御手紙の儀は差止」めるよう連絡してきた。長兄玉三郎の真意の程はわからないが、すでに健之助はそれまでに親類や友人宅に当てて沢山の手紙を出しており、当惑気味であったが長兄の命に従っている。家制度が色濃く残っていた時代にあって、父親死去に伴い家督を相続した長兄の命令は絶対であった。これ以降、親類や友人からしばしば音信が届くが、そのたび健之助は長兄に対して音信をくれた友人・親戚へのお礼や健之助の近況を伝えてほしいと書き添えている。

異文化社会に身を置く健之助にとって、郷里からの手紙こそが心を慰めてくれるもの、また緊張から身を解きほぐしてくれるものであった。それだけに、長兄による手紙差し出しの制限はかなり応えたものと思われる。

同年8月14日、横浜正金銀行サンフランシスコ支店を通じて25ドルを送金。2回目の送金である。同月末、鉄工所での仕事を辞めて、カンザス州ワグスタフに移動し、鉄道工夫として働き始めた。夜間には学校に通って語学を勉強している。

健之助は、日本を発って以来、同郷の桜木金次郎、桜木重次と義兄弟の契りを結び、爾来寝食を共にしてきた。しかし、桜木重次は鉄道工夫が性に合わず、ヒヤプルで大根の売買の仕事に従事することとなり、9月末に別離することとなった。桜木金次郎とは同行している。

鉄道工夫の賃金は1日1ドル50セントであった。しかし、鉄道工夫の労働組合が労働時間の短縮（8時間労働）と賃上げ（1日2ドル）を要求して労使紛争が生じ、11月下旬には労働組合がストライキを起こした。この間、就業できず、従って収入

もなく健之助は途方に暮れる日々が続く。このときの状況について、12月初旬に郷里に出した手紙によれば、「出国以来、早や二度目の新年を迎えますが、何の得る所も無之故郷へ対して誠に面目が御座いませんが、其所はまあ暫く御辛抱の程を願い申します」（1907, 12, 3付）とある。おりしもアメリカでは、ニューヨークの大銀行が倒産するなど不景気で、失業者が増大し、このカンザス州の鉄道工夫の賃金も1㌦25㌣に下がった。健之助は、ここを辞して他に行くあてもなく当地に留まることとなった。健之助と一緒に働く日本人仲間は、静岡11人、広島5人、陸奥1人、熊本4人、愛知2人など総勢38名で、不景気で賃金が下がり、また、労働日数もかなり減り、郷里への送金が困難な状況に立ち至りながらも、「毎晩国々のなまりを出して大笑いです。一番おもしろいは熊本に陸奥、広島です」（1907, 12, 16付）と記し、郷里の肉親を安心させている。

1908年になると不景気は一層激しさを増した。健之助の労働日数は、1月が12日間、2月が8日間、3月に入ると僅か3日働いただけで休業状態となり、3月中旬に至って会社より日本人労働者の一団38名は全員解雇されてしまった。健之助は、愛知県津島出身の津田某がカンザス市で職業斡旋を兼ねた請負師をしており、同県人のよしみで津田を訪ねると、カンザスでも不景気で仕事はなく、デンバーに行くように勧められた。

4月になると、デンバーの南西約150マイルに位置するロッキーフォードにおいて農業労働（大根の請負耕作）の働き口を得て就労し、同郷の桜木重次とも再会し、また3人一緒に働くこととなった。

アメリカが不景気で収入が少なく、郷里へ送金することが困難と成ったが、近況を知らせる手紙は、月平均2度は出していた。長引く不況で、自分の生活費を稼ぐのにも苦慮する生活が続く中で、阿弥陀様への信仰と長兄からの近況を知らせる手紙がせめてもの慰めとなった。長兄からも月1度の割で音信が届いていたが、送金が出来なくなると、郷里からの便りも滞った。

1908年1月以来約半年間、郷里からの手紙が届かず、健之助はかなり神経質になっていた。5月末、長兄に宛てた手紙には「当方よりは、毎月一回宛は必ず書面を差出とも、御地よりは何か御立腹と見え本年に至りて僅壱本より下されず、又親戚よりも不通。桜木などは親戚よりも度々親元よりは申すまでもなく二回宛

て之様子、 …中略… 当方にて今後親元及親戚に限り書面の義は遠慮致心組故右御承知下されたく候」(1908, 5, 27付) と記し、さらに、同書の追伸には「今暫く辛抱致し米国のニューヨーク市より英国ロンドン行き度心組」とロンドン行きをほのめかし、その末尾には「天下浪人」と記している。このロンドン行きを企図する手紙は、健之助の寂しさ、やるせなさを吐露し、長兄に手紙を督促する手段でもあった。

落胆していた健之助の所に届いた久しぶりの音信は、長兄玉三郎の次男貞雄の死亡通知であった。訃報に接した健之助はすぐさま長兄に宛てて死亡見舞い状を出した。その手紙の末尾に「先号を以て余り御貴家より書状の無き故非常に立腹致たる結果差出したる書状故御気に障るかも知りませんが、其書状も何かと云えば内の事を思ふその事故御立腹の段は此状と同時に御流し下さい」(1908, 6, 2付) と記して先の長兄への手紙の非礼を詫び、さらに「小生も昨年の冬以来永らく遊び居りしが、昨六月一日を以て初働きに掛りし故御安心あれ。今度の仕事は短時期故朝は二時半に起き、晩は九時半までは仕事場にて居ります。それも出仕事と違い請負故皆々競争にて働く。身体のつかれは全身皆痛し充分の事従って平素の自分の事も節々がやめて動かす事が出来ぬ位ですが、朝二時半の目覚まし時計にて皆吾一同起きて仕事場へ行き仕事に掛かる時は三時半に掛かります」と記し、ようやく仕事を得たという安堵感と、日々の労働の厳しさを訴えている。

7月下旬に同郷の友人桜木重次が病気に罹り、ロッキーフォードの病院に4週間入院した。その間、健之助が義兄弟として世話をし、さらに治療費を用立てた。収入が少ない上、友人の治療費を立て替えたため、貯えもなくなり郷里への送金ができなくなった。

11月3日は明治天皇の生誕を祝う天長節である。日本人居住者の少ないロッキーフォードでも、天長節は盛大に催された。郷里へ近況を知らせる手紙には「昨天長節も異国にて天皇陛下を祭ると思はれん程盛大に挙行致したる故、白人等は吾々日本人の異国に移住するとも区別なく上を尊び、又祝日には多大の金額を費やしてまでも盛んに祝す其愛国心の深きに感服致さん者はありません。御祭日に至りては当地の新聞始めピヤプル誌、都会の新聞にも皆日本人の愛国心の深きことを記載致したる様子。…中略…又其日の飾りは二間四方の御玉座を作り白木綿にて

張廻し周囲には絹の日本国旗を立て（二十四本）、御真影を飾り絹の幔幕を張り其前に御定紋入の紫の幕を張り、供物はスルメ・カツヲブシ・昆布・果物・菓子を供え、五間計隔り大なる緑門（アーチ）を作り、其の横に二十間計の旗竿を立て上に亜米利加、下に日本国旗、何れも一間半四方位の物を挙げ、下には満艦飾（萬国々旗）に日本製の提灯を百と国旗の数は三百五十本計、余興としては昼夜合計百本の打上煙火と種々なる作花火を五十本計、此夜の見物人には祝いとして菓子を金弐十弗の余程にて施し、夜は十時限にて閉ず。其甚しき盛大なる天長節は筆紙に尽し切れん位でした」（1908, 11, 4付）と記している。

この様子を撮した写真を郷里の実家に送り、親戚宅にも回送を依頼している。また、天長節を催した日本人仲間で協議の上、東京の博文館発行の雑誌『太陽』に掲載を依頼した。11月下旬の手紙には「東京博文館へ送り、各雑誌に掲示方を依頼致し置き候間、必ず出版致す故同月（1月）の雑誌を御注意下され度候。…中略…雑誌に掲げらるる様な事は一代に一度の事故記念の為め同雑誌を御保存下され度候」（1908, 11, 28付）とあり、異国の地でこのように盛大に天長節を祝える事は、健之助や日本人移民にとって晴れがましく、日本人としてのアイデンティティを再認識する機会でもあった。

同郷の稲垣悦蔵は長年ロッキーフォードに滞在して働いていたが、貯えもなく、病気に罹り帰国する事となった。稲垣治三郎を発起人として、稲垣悦蔵を日本に帰国させる費用を捻出すべく同郷人の間に奉加帳が廻り、健之助も10ドル（20円）を寄附し都合15名、150ドルが集められ、この金で悦蔵は帰国した。誰かが病気に罹り、不慮の事故、あるいは死去したときには、同郷人や同県人仲間が中心になってその世話をするのが常であり、日系移民社会において、この相互扶助は一種の義理であった。日系移民社会において、義理を欠く者は、郷里に戻ったときムラ社会から嘲り・嘲笑の的となった。即ち、移民社会における交友関係のあり方は、そのまま郷里の人間関係に連関するのであった。

3）郷里との関わり

実兄の桂次郎が多額の借金を作り、長兄玉三郎がその借金を肩代わりすることとなった。長兄は先祖伝来の田畑を売却して借金を返済した。この知らせを受け

た健之助は、長兄を同情して、「兄上様の借財整理に付き祖先伝来の宝とも称すべき地所を売られし様実に祖先に対して済まん。…中略…小生本年中に日本金五百円は心棒して送金します。又昨年来先月に送りました金、家事整理と有れば決して御心配無之、御使用下さっても苦しく有りませず、諸掛物及び親類交際費には御遠慮なくかえって小生は嬉しくあります。小生の送り金にて家事の御使用と有れば故郷に有って不幸致せし万分の一の幸にも相成ると思えば嬉しく有ります。今後ともに御遠慮無く送金請求致して下さい。何時にても繰合送ります」（1909, 6, 4付）と記している。

異郷にあって、艱難辛苦に耐えながら実家の発展を願って身を粉にして働き、倹約して送金を続ける健之助にとって、実兄の過失による多大なる借金は納得しがたく、また、そのため、山内家から先祖伝来の地所がなくなる事は承伏しがたいことであった。健之助は出稼ぎを目的として移民したが、しかし、彼は資産家の生まれであり、そのプライドを持っている。移民することに多少の後ろめたさがありながらも、渡米に踏みきったのは、貧しさからの脱却ではなく、家運隆盛を願ってのことであった。

メキシコ廻りでアメリカに入国する際に、渡航費用として大陸殖民会社の名古屋出張所に、墨国渡航費用88円、検疫費2円25銭の合計90円25銭を支払い、その他の身の回り品、日本国内の汽車賃、小遣い等に62円39銭、総計152円64銭にのぼる大金を使っている。その経費の大半は長兄が負担したと思われ、健之助にとって、早くこの渡航に関わる借金を返済すべく、渡米後まもなくから送金を続けてきたのである。

健之助は、メキシコの入植地に着くや否や移民会社との契約を破棄して、アメリカにむかった。その時の状況について、「契約の際の談とは目的地は雲泥の違いです。気候も又春の如しとの話なりしが、夫れと正反対にて百二十度以上にて、迚も日本人の労働の得べからざると又会社の吾々を取り扱うこと全く牛馬を取り扱う如し、食料品切故請求致せとも充分なる品を与えず」（1909, 9, 26付）と記している。

健之助ら一行は、現地監督である藤田小五郎に掛け合ったが、監督はこれに応じなかった。先に引用した9月26日付の手紙によれば、「（1906, 12, 24）朝8時

頃、同県人16名は事務員（藤田）に離別の話を述べ、意気昂々として当地を出立す。決して逃走にはあらず」とし、就労場所であるメキシコのコリマ・ラ・キャンプを出立し、アメリカに向かった。

大陸殖民会社の現地監督が彼ら契約違反者を厳しくとがめなかったのは、違約金を郷里の保証人から得た方が得策と考えたようである。健之助が契約を破棄して2年余りが経過した1909年9月下旬になって、移民会社が違約金支払いを保証人である山内玉三郎に請求してきた。猶予なき催促で、玉三郎はやむを得ず旧盆前の物いりにも関わらず80円程の金を支払った。

同年10月、長兄が健之助に宛てた手紙によれば「茲に一つ御願致たきは、御案内の通り弟桂次郎事件にて拙者の所有貯金は全部煙となり其後貴下よりの送金其他家内○○となり貯へし金は又々盆前会社へ取られ目下は無一物となりて大に苦み居り候。去りとて本年度玄米は順次下りて昨冬取入当時の相場五円五十銭より一度も上らず殊に近頃は四円台となり、又三円台となりて未だ弐十俵位は売米あれども足ても四円内外では売れず、今月否九月よりは来年四五月頃迄は役場納税年々一八九円余にて不肖の俸給は大部浪費致し自家小遣銭丈宛不足するというナサケなき有様につき貴下より少し送金願度候。未だ貴下の渡航以来斯る見苦しき事申し上げし事御座なく候上、今回は斯る始末故赤面乍ら貴下に依頼す。大至急にはあらざるも多少相願度候」（1909, 10, 3付）とある。

次男桂次郎の多大な借金の肩代わり、健之助の契約不履行に伴う違約金の支払い、米価の下落によって所得が減少する中で、高額な税負担を迫られ、実家を預かる玉三郎にとって、家計の維持は困難の度を極めていた。異国の地で、額に汗して働く健之助に金を無心することは耐え難いことであった。一方、健之助にしてみれば、実家の家計を逼迫させた要因の一端が、契約不履行に伴う違約金支払いのためであるといわれれば、送金に応じざるを得ない。錦を飾って郷里に帰るという夢の実現は容易なことではなかった。

郷里を出発して以来、健之助は同郷の桜木重次、桜木金次郎と兄弟の如く交誼を結んで暮らしてきた。しかし、桜木重次は1908年8月に病を得て入院し（高額の治療費を健之助が一時立て替えて支払った）、退院後も体調が優れなかったためか、勤労意欲に欠け、邦人旅館に入り浸って囲碁や将棋などに熱中するように

なってしまった。

1909年5月、健之助は重次に立て替えた治療費（37ドル45セント）の一部の返済を迫った。重次は一部を銀行振り込みで返済したといい、健之助は受け取っていないと、両者の間で金銭トラブルが生じ、健之助は重次の言動にいや気がさし、ついに絶交となった。

健之助は郷里の長兄に手紙を送って重次との金銭トラブルを報告し、また重次の父親（桜木新一）にも、健之助と重次の金銭貸借に関する手紙を送付して、貸金返済を迫った。健之助と重次の金銭トラブルは郷里の肉親をも巻き込んでしまった。健之助の長兄玉三郎が新一に出した手紙によれば、「愚弟が立腹し余り貴息重次君に向かって絶交を申し送れば貸金の請求する権利御座なくと存候又迂生とても平素貴下と親密に暮居り候処へ在外数千哩離れし彼らが同郷の友誼を以て相互に貸借を為し或は僅かなり感情の衝突より絶交し或いは融和するなど一向迂生の関せず焉に御座候間斯る書面を証として貴下に請求するなど毛頭御座なく候」（1909, 12, 8付）とある。結局、この金銭トラブルは、1910年5月になって重次の父親新一と健之助との間で円満解決がなされたようである。しかし、健之助と義兄弟の契りを結んだ重次との関係はついに修復されることはなかった。異郷にあって互いに助け合いながら、仲睦まじく暮らしてきた同郷の仲間が、些細な金銭トラブルが原因で絶交し、さらにはその問題は海を越えて郷里の肉親同士の交友関係をも壊してしまったのである。

健之助はその後、桜木金次郎とは交友関係を維持していたが、しかし、金の貸し借りには慎重な態度をとるようになった。1910年10月に長兄に宛てた手紙に依れば、「先日桜木金次郎氏には郷里が母家建築には多大の金が入用故、今月末には弐百弗（日本円四百円）送金致す様申居り候が、事実彼の宅には建築致す様子有之哉、一寸御尋ねまで。何となれば、極秘密ですが小生に其金の内七八十弗取替呉れと云ひし故、小生も少し送金致す心組みの所左様故、彼に一時取替考え故、然し此事彼の家に伝言なき様御願ひまで」（1910, 10, 17付）とあり、健之助にとって、無二の親友からの無心を断りがたく、金次郎の言動の真偽の程を密かに伺っているのである。重次の一件以来、友人とはいえ、金銭の貸し借りには疑心暗鬼になっている健之助の様子がよくわかる。

4）山内健之助、その後

健之助は、知人の紹介により、1915年７月に海部郡八開村出身の林いとと写真結婚した。林いとは11人兄弟の次女で、長女のひながカリフォルニア州ウォーナッグローブで農場を経営していた佐藤助三郎（八開村出身）のもとに嫁いでいた。健之助はいとと結婚して以来、コロラド州ドランゴに居住して、鉄道工夫として働いた。1917年には長女いくが誕生し、翌1918年には次女よし、1921年には三女雪子が生まれている。1923年には、いとの妹たかが石塚国三郎（佐織町出身、カリフォルニア州で農業に従事）と結婚のため渡米した。たかは今も同州ウォーナッグローブに健在である。山内健之助は、その後長年勤めた鉄道会社を辞めて、カリフォルニア州スタクトンに一家転住し、ホテル業を営んだ。スタクトンは州都サクラメントの近くで、日系人が多く居住する町である。ここで、長男尚司、次男利行が生まれている。

1929年ニューヨークのウォール街の株価大暴落に端を発した大恐慌により、日本人移民の中には帰国する者が相次ぎ、山内一家も、1932年にホテル業をやめて帰国した（健之助は、仕事の残務整理などで少し遅れて帰国した）。帰国した当初は、郷里の稲沢に住んだが、後名古屋に転居し商売を始めた。1972年、88歳で他界した。明治・大正・昭和のまさに激動の時代に、健之助は、その青春時代のほとんどを異文化社会に身をおき、波瀾に富んだ人生を歩んだ。

Ⅲ．おわりに

故郷に錦を飾るという大きな夢を抱いて、波濤に船出していった。しかし、偏見に基づく人種差別や迫害、さらには景気の調節弁としての移民労働者特有の不安定な雇用形態の中にあって、苦悶する日々が続いた。出稼ぎを目的として移民した健之助にとって、現実はあまりにも厳しく、彼の夢を実現させるのは容易ではなかった。苦悩する日々が続く中で、健之助の心を救済するものは、郷里からの音信、そして阿弥陀様であった。

健之助は渡米して以来、手紙が残されている1906年12月より1913年11月までの５年間に郷里に送金した額は約500ドルに達する。自らは倹約を旨とし質素な生活

を営んだ。郷里の母親は、キリスト教の社会に身を置く健之助にたいし、阿弥陀仏への信仰の大切さを説いた。健之助はそのような母親の子を思う気持ちに対し「小生が耶蘇教の真ん中に住して居る故若しも遺伝致されはせんかと御懸念遊さるるは最もなれども、小生は耶蘇と賭博は大禁物故、決して致しまじく故其事計は御安心下され度候」(1911, 5, 24) と記し、決意の程を表している。健之助の歩んだ道は、多くの移民が歩んだ道でもあった。

多くの移民が郷里の発展を夢見て、額に汗しながら重労働に耐え、送金し続けた。その結果、地域経済は大いに潤った。異文化社会に身を置く移民が郷里とどのような関係を保持していたのか、黄金郷を夢見て渡った移民が厳しい現実に直面したとき、心はどのように揺れ動いたのか。健之助の手紙の解読と分析によって、その一端が明らかに出来たと考える。山内利行氏の御厚意により、山内健之助の貴重な手紙を拝読することが出来た。後記に付して感謝する次第である。

注

(注1) 筆者は、本誌『人文科学研究』第30号 (2001, 3) において、「愛知北米移民の研究 (Ⅰ)」と題して、海部・津島地域を中心に明治〜大正期におけるアメリカ移民の契機と実態、さらに出移民の要因分析を行った。また、『同誌』第31号 (2002, 3) において、「愛知北米移民の研究 (Ⅱ)」と題し、カリフォルニア州北部でサンフランシスコ近郊に位置し、戦前まで「北米の愛知村」と称されていたウォーナツグローブを中心に、愛知北米移民の定住過程について論じた。

(注2) 山内健之助は、アメリカに移民した1906年12月以来、郷里の長兄山内玉三郎宛に多くの手紙を出した。玉三郎はその手紙が来るたびに整理して保存した。幸い、その手紙の一部 (1906年12月7日付から1913年11月11日付までの106通) が同家に保存されていた。その後の手紙も存在したが、家屋新築に際して紛失してしまったという。

(注3) メキシコ経由のアメリカ移民の実態については、筆者が出筆を担当した『八開村史通史編別冊』(八開村史編さん委員会 2000, 4) 所収の「愛知の北米移民」pp.286〜294に詳しい。

(つつい　ただし　文化人類学)